

序 文

「外傷診療は整形外科における基本である」とは、よく聞かれる言葉です。実際に外傷診療の第一線として活躍しているのが若手整形外科医であることは、多くの病院において事実でしょう。実際に診療にあたる若手医師を上級医が指導するわけですが、ともすれば理論的裏づけに乏しい、自身の経験に基づく治療を若手に押しつけることにもなりかねません。近年は、骨折治療について系統的に学習できる講習会も複数開催されています。これらは若手医師の学習の場であると同時に、指導医においても知識のupdateが可能なようプログラムも工夫されておりますので、多くの先生方に知っていただきたいと考えています。

また、複数の大学病院や基幹施設で「外傷センター」が相次いで設立されております。重度外傷症例において複数診療科が集い、集学的治療を行うことで「防ぎ得た外傷による後遺障害」(preventable trauma disability)を減らすべく活動しております。2020年4月より開始される日本整形外科学会症例レジストリー(Japanese Orthopaedic Association National Registry ; JOANR)に先立ち、日本骨折治療学会では開放骨折を対象としたレジストリーを構築し、運用しております。外傷治療、特に多発外傷や重度外傷において、どの程度の機能障害が起こりうるのか、またそれが外傷センターで治療を行うことで改善するのかを明らかにすることが、今後の課題の一つであるといえます。

一方、超高齢社会においては骨粗鬆症を基盤とする脆弱性骨折の増加が喫緊の課題であります。脆弱性骨折をきっかけに整形外科を受診し、骨粗鬆症の診断がなされることもまれではありません。脆弱性骨折を繰り返させないために、脆弱性骨折を受傷し来院した患者には骨折治療と同時に骨粗鬆症治療も行う必要があります。日々新たな薬剤の登場する領域ですが、積極的に情報収集を行い、日常臨床に活かす必要があります。

近年、非定型骨折や病的骨折など、従来の骨癒合理論では治療が難しい骨折も登場しております。このような特殊な病態に対する基礎研究や骨癒合を促進するための新規治療開発も進めていかなければなりません。今回の特集では、外傷の教育・診療・研究の第一線を担う先生方にご寄稿いただきました。皆様の日常診療のお役に立てば幸いです。

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科整形外科

尾崎敏文